



## 植生の概要

ひたちなか市の殿山町の海岸は、平板状の岩礁が低潮線付近から漸深帯に広がる。その所々には岩礁塊があり、形は凹凸のあるもの、傾斜面を持つものと変化に富んでいる。大潮時に海水が退行するあたりには、潮位で潮間帯下部あたりの高さの岩礁が多い。

エビアマモなどの植生は、表1のとおりである。

St. 1. 姥の懐マリンプールの東にエビアマモが生育するが、個体数は少ない。付近には、ナガアオサ、オゴノリ、コメノリ、カイノリなどが多くみられる。

St. 2. 平板状に広がる岩礁の最先端にきのこ状岩礁がある。この手前約10mの潮間帯下部にエビアマモの大群落が生息している。付近には、アラメ群落、エゾシコロ、ハリガネなどがみられる。代表的な生育地点である。

St. 3. St. 2. より汀線と平行に北へ約80mの平板状の岩礁にエビアマモがみられる。付近には、スガモ (*Phyllospadix iwatensis* Makino) の大群落が広がっている。

St. 4. St. 2. のきのこ状岩礁と道路下のテトラポットを結んだ線上のテトラポットより約15mにエビアマモが生育している。付近には、ネバリモ、ツノマタ、タンバノリなどがみられる。

St. 5. きのこ状岩礁の北東約30mにあるタイドプールにエビアマモの大群落がある。潮位は低潮線から漸深帯にかけてで海水中から裸出することはない。付近にスガモ、ハリガネが多くみられる。個体数も多く代表的な生育地点である。

St. 6. きのこ状岩礁から離れて、独立した沖の岩礁にエビアマモが生育している。潮位は潮間帯下部にあたる。

St. 7. 崖上のマンションの南、強い波浪を直接

表1 エビアマモの生育地点 (殿山町)

St.	生育範囲 (m)	垂直分布
1	2×2	漸深帯
2	3.5×4	潮間帯下部
3	0.8×1	漸深帯
4	1×2	漸深帯
5	10×15	漸深帯
6	2×3	潮間帯下部
7	7×15	潮間帯下部
8	2.5×5	漸深帯



図2 干潮時の殿山町海岸のスガモ群落。



図3 きのこ状岩礁とエビアマモ (St. 2.)

受ける岩礁上にエビアマモの大群落がある。潮位は潮間帯下部にあたる。付近には、アラメ、ヒラムカデが群落を形成している。

個体数も多く代表的な生育地点である。

St. 8. 殿山町の北端，屋外放送用スピーカーポールより沖約70m にエビアマモが生育している。付近には，フトジュズモ，ヒヂリメン，ミツデソソなどがみられる。

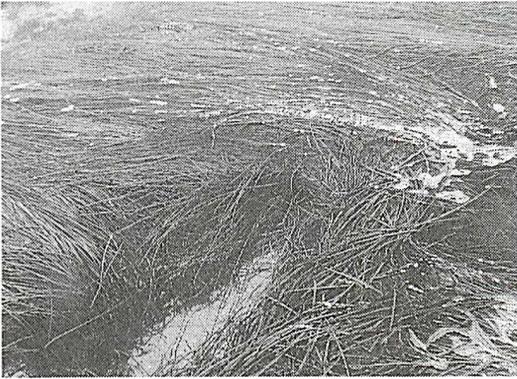


図4 低潮線付近のエビアマモ群落 (St. 5).

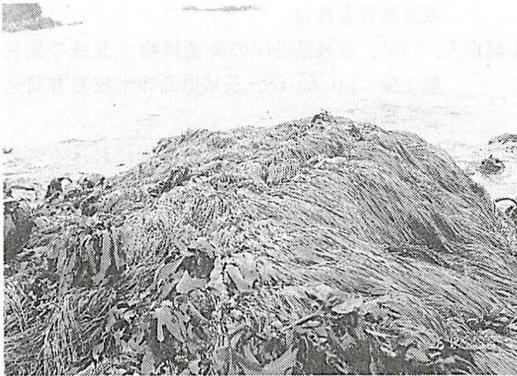


図5 潮間帯下部のエビアマモ (St. 6).

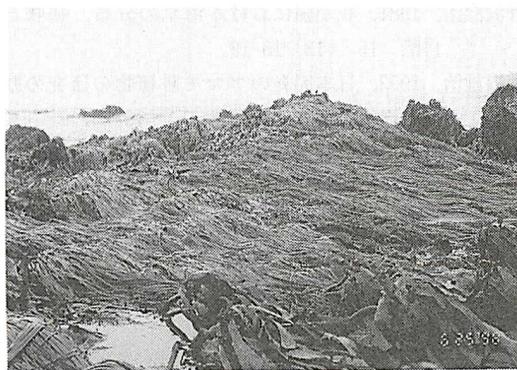


図6 エビアマモの大群落 (St. 7).

スガモは群落を形成し平板状の岩礁に多く，潮位は低潮線付近から漸深帯にかけて生育している。他には，オオハネモ，スジウスバノリ，エゾシコロ，ハリガネ群落が目立つ種である。

平磯町南部にあたる平磯漁港の北堤付近には，エビアマモの生育地点が数地点あるが個体数はそれほど多くない。これより北1.3km に茨城県水産試験場がある。この北に1地点エビアマモの生育地点がある。個体数は少ない。スガモは各岩礁に点在し個体数も多い。波浪の強くあたる岩礁では，低潮線より高さ1.7m のところでもみられる。

磯崎町では磯崎灯台付近でエビアマモが1地点で確認できた。スガモは殿山町や平磯町と同様に各岩礁に広く生育している。

### 考察

中庭 (1975) の報告以来調査を継続しているが，茨城県沿岸における暖海性海草であるエビアマモの分布は，1987年には5地域に生育していたが，1992年には，東茨城郡大洗町，ひたちなか市平磯町，多賀郡十王町伊師浜の3地域に減少した。その後，北茨城市五浦 (1994. 5. 25) の2地点で確認 (未報告) した。これは太平洋沿岸における北限地にあたる。これらのいずれの地域でも生育する個体数は限られており，希少種といえる。

本報告のひたちなか市殿山町のエビアマモは，



図7 エビアマモのへら状総包。

中庭報告の3地域及び北茨城市五浦のいずれの地域よりも生育地点が多く8地点で確認できた。しかも、大きな群落を形成していた。これは、いまままで確認した他の地域には全くないことである。エビアマモの生育帯は、波浪を強く受ける岩礁地点では高く、潮間帯下部に生育しているが、平板状の岩礁では、低潮線付近から漸深帯に生育している。平磯町や磯崎町でもエビアマモの分布地点は確認できたが極めて少ない。また、生育個体数も少ない。

以上のような現状から、太平洋沿岸における北限地にあたる茨城県沿岸のエビアマモは、絶滅危惧種として保護の必要性を強く痛感している。

寒海性海草のスガモは、中庭報告(1995)で11地域で確認しており茨城県沿岸に産する海草の主な種となっている。また、中庭・小高(1983)はスガモの南限地が従来、茨城県沿岸とされていたが、千葉県銚子市外川であることを確認して報告した。

スガモは、ひたちなか市の3地域に広く生育しており、また、個体数も極めて多い。

ひたちなか市の殿山町海岸は、茨城県における北限種であるエビアマモの最大の海草群落が形成されている地域である。エビアマモの生育地域が減少している現在、茨城県沿岸に残る最後の貴重なアマモ場である。

#### 参考文献

相生啓子, 1987. 岩礁潮間帯の顕花植物—スガモ—の生態学的研究. 大植臨海研究センター報告 13: 7-10.  
 相生啓子, 1996. 藻場生態系—アマモ場を中心に—. 遺伝 50 (7): 24-29.  
 坂井恵一・筒井功・山岸裕一, 1995. 能登半島浅海域における生息種の概要(予報). のと海洋ふれ

あいセンター研究報告 1: 49-62.  
 菊池泰二, 1974. 世界における海草藻場研究の現状. ベントス研究会連絡誌 7 (8): 1-21.  
 Miki, S., 1933. On the Sea-Grasses in Japan (I) *Zostera* and *Phyllospadix*, with Special Reference to Morphological and Ecological Characters. Bot. Mag. Tokyo 47: 842-862.  
 Miki, S., 1934. On the Sea-Grasses in Japan (II) Cymodoceaceae and Marine Hydrocharitaceae. Bot. Mag. Tokyo 48: 131-142.  
 Miki, S., 1934. On the Sea-Grasses in Japan (III) General Consideration on the Japanese Sea-grasses. Bot. Mag. Tokyo 48: 171-178.  
 中庭正人, 1975. 茨城県沿岸の海産顕花植物の分布. フロラ茨城 68: 1-3.  
 中庭正人, 1977. 「生物Ⅱ」の生態分野への教材化のための茨城県沿岸の海草(顕花植物)の研究. 茨城県教育研究紀要 第5集 pp. 89-93, 茨城県教育委員会.  
 中庭正人, 1981. 茨城県沿岸の海産植物. 茨城の生物 第2集 pp. 52-68, 茨城県高等学校教育研究会生物部.  
 中庭正人・小高利彦, 1983. 太平洋沿岸におけるスガモ属2種の南・北限地における生態. 水草研究会報 14: 9-11.  
 中庭正人, 1987. 茨城県沿岸における海草エビアマモの分布. 水草研究会報 30: 10-11.  
 中庭正人, 1992. 茨城の沿岸各地の海産植物. 茨城の生物(平成4年版) pp. 255-260, 茨城県高等学校教育研究会生物部.  
 野沢治治, 1974. 海の水草. 遺伝 28 (8): 43-49.  
 野沢治治, 1981. 我が国における海草の分布. 植物と自然 15: (13) 15-19.  
 大森雄治, 1993. 日本固有のアマモ科植物の研究の歴史と現状. 水草研究会報 51: 19-25.  
 田中剛・野沢治治・野沢ユリ子, 1962. 本邦産海産顕花植物の分布について. 植物分類地理 20: 180-183.